

先天性心疾患をもつ思春期の子どもの病気認知

著者	仁尾 かおり
発行年	2002-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10422/364

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	32	(ふりがな) 氏 名	にお 仁尾 かおり
修士論文題目	先天性心疾患をもつ思春期の子どもの病気認知		
<p>【目的】先天性心疾患をもつ思春期の子どもが、自分の病気や病気がもたらす結果をどのように知覚し、受けとめているかを明らかにする。</p> <p>【方法】質的因子探索型研究とし、半構成面接を用いた。研究参加者は、近畿にある循環器病専門の病院に入院中の 11 歳～15 歳の 11 名とし、1 名に 2 回の面接を実施した。分析は、逐語化したデータを文脈に分け、各文脈における中心的な意味を明らかにした後コード化した。次に全事例から得られたコードを統合、比較検討し、サブカテゴリーを抽出し、サブカテゴリーの移動、統合、分離、再編を繰り返しながらカテゴリーを抽出した。</p> <p>【結果】先天性心疾患をもつ思春期の子どもの病気認知は、44 サブカテゴリーと 12 カテゴリーにより構成されていた。12 カテゴリーは、[病気をもって生まれたことは仕方がない][病気のある生活が自分にとっての普通の生活][治療・処置には苦痛と恐怖を感じるがやむを得ない][不確かで死を予感させる将来に不安を感じる][病気を自分の問題だと実感できない][病気をもった人として扱われることに苛立つ][人の世話にならないといけない自分に劣等感を感じる][友人や社会との交流が阻害されることに孤独と焦りを感じる][病気をもっている自分には限界がある][病気に安住できる][病気に負けてはいない][自分の身体は自分で守ることが出来る]であった。</p> <p>【考察】病気認知を構成する 12 カテゴリーは、病気の受容に関する認知、社会的な疎外と限界に関する認知、病気のコントロールと自立に関する認知の三側面に大別され、次のことが考えられる。 先天性疾患の特徴から、病気をもって生まれたことは仕方がなく、病気のある生活が普通の生活であると思っているが、心疾患が自覚症状を感じやすく死に直結する病気であることや、周囲から与えられる情報の曖昧さから不安を感じる等、病気の受容をめぐる葛藤している。また、思春期になると活動面において友人との差が一層開くことや、進路選択で制約を受ける等、病気をもっている自分の限界に直面することになり、社会的な疎外と限界によって困難を感じている。さらに、先天性疾患であるため病気に対して同一性をもっていることや、自覚症状の出現に現状認知を余儀なくされる心疾患の特徴に、自分自身を考えるという傾向や、保護された生活からの脱出を模索するという思春期の特徴が加わり、自分で病気をコントロールし自立に向けて挑戦しようとしている。</p> <p>以上のことから、看護者の役割は、子どもが自分の病気をどのように受けとめているかを知り、自分の身体は自分で守ることができるという思いをくみ、子どもの思いに沿った学校生活を送ることができるよう調整することであると考える。</p> <p>【総括】先天性心疾患をもつ思春期の子どもの病気認知を明らかにしたことにより、生命予後が改善し思春期を迎える子どもが増え始めた小児循環器医療において、子どもの思いを理解し、その発達段階や病気認知に応じた看護を実践する一助となるものと考ええる。</p>			

- (備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)
2. ※印の欄には記入しないこと。